誰

か

誰か

暗い、暗い、と云ひながら
誰か窓下を通る。

室内には瓦斯が灯り、
戸外はまだ明るい筈だのに

暗い、暗い、と云ひながら
誰か窓下を通る。

西条八十
詩集『砂金』より

1

しぶとい熱気をはらんだ西風が、埃っぽく乾いたコンクリートの歩道を吹き抜ける。風の後味にはかすかな涼しさがあった。しかし暑気は、閉店時刻を過ぎても席に残って話し込んでいる客のように、まだ当分は腰をあげそうにない。

白地に墨痕鮮やかな立て看板は、二対の針金で電柱にくくりつけられているおかげで、強い風にも煽られることなく、忠義深い歩哨のように直立して、白金色の陽光を照り返している。街のいたるところに、ピンクめいたタテカンを、文字通りステカンとして設置しまくる業者とは違い、さすがに警察は仕事が丁寧だ。針金の結び目は、こよりのようにきれいによじって丸めてある。必要以上にこのタテカンに近づいた不用意な誰かが指を刺したりしないようにという計らいだろう。ますますよろしい。

そんな不用意な誰かがどこにいるのか。ここにいる。私だ。ポケットから取り出した大判の白いハンカチで額の汗をぬぐい、首筋まで拭いて、ついでに腕時計を見た。午後二時になる。時計の文字盤では、三つ重ねのアイスクリームを乗せたコーンを持ったコミックのキャラクターの犬が笑っている。

これは桃子からの借り物だ。何ヵ月も前に壊れたきり、修理することもなく引き出しにしまいこんである私の腕時計のかわりに、娘が貸してくれたのである。

「お父さんの時計はどうしたの？」

「壊れちゃったんだ。それとも電池が切れたのかもしれない」
「なおしてもらえばいいのに」
「携帯電話があれば、腕時計は要らないと思ってたんだ」
「でも今日は時計がいるの？」
「うん。実は携帯電話も壊れちゃったんだよ」
この世に生れ落ちてまだ四年ながら、すでにして笑顔の達人となっている我が娘は、いつだって私を魅了してやまない笑みを浮かべてこう言った。
「お父さんは、何でもコワしちゃうメージンだね」
桃子の小さな脳のなかに、「名人」という言葉を登録（インプット）したのはどこの誰だろう。あるいは本か、映画かコミックか。教師が誰であるにしろ、彼女はそれをきわめて正しく使った。子供は呼吸するように学習する。だから私も妻も、耳に汚い言葉は一切口にしないよう心がけている。
それでも今は、禁を破り声に出して罵（ののし）りたい。幸い、ここには桃子もいないから。なんでこんなにクソ暑いんだと。すると太陽は応じるだろう。それならあんたは、どうしてそんなふうに、道端にぼんやり突っ立っているんだね？
私には私の用があるのだ。私はこの立て看板を見にきた。事故現場を、この目で確かめるために足を運んできたのである。事故の起こった、まさにその時刻を選んで。
東西に延びる十五メートル公道に沿って広がる、静かな住宅地だ。私がタテカンと共に佇（たたず）む側には、総戸数三百八十九戸という大型マンションが、秋の景色を先取りするうろこ雲の浮かぶ青空を背景にそびえ立っている。仰ぎ見ると、書き割りのように非現実的な感じがするほど立派な建物だ。

マンションの右隣には、ぐっと規模の小さなアパートが二つ。左隣にはさらに小さな商業ビルと、古い戸建住宅が肩を寄せ合っている。道を隔てた対面にはこぢんまりした児童公園があり、その並びにも戸建住宅がちまちまと整列しているが、公園の向こうには「高崎電子」という社名をかかげた灰色のビルが見える。ひと月の小遣いをまるごと賭（か）けてもいいが、この児童公園は、高崎電子の社員たちの憩いの場となっているに違いない。真冬と真夏を除いたすべての季節、彼らはここのベンチやブランコに座り、膝（ひざ）の上に昼食を広げる。彼らの昼休みの時間帯には、児童公園を利用する子供たちの大半は、まだ学校という檻のなかに閉じ込められているのだから。
公道を彩る街路樹は、枝を広げ葉を茂らせている。街路樹の足元に四角くのぞいている地面にも、どれも例外なく、さまざまな草花が茂っていた。赤や黄色の花が咲いている。雑草ではない。町の住人たちが丹精しているのだろう。
私はこの町が気に入った。訪れてすぐそう感じたが、タテカンのそばで三十分以上を過ごした今となっては、引っ越してきてもいいような気分にさえなっていた。
道路に沿って西へと目をやると、灰色のコンクリートが、大きくうねるように波うっているのが見える。舗装が悪いのではない。橋があるのだ。その下には、都区内にしては上々の程度に澄んだ川が流れている。護岸は遊歩道に整備され、ツツジの植え込みが並んでいる。ぶらぶら歩きするのもよし、釣り糸を垂れるのもよし。妻もきっと喜ぶだろう。私は彼女に釣りを教えてやることができる。生餌（いきえ）は私がつけるのだから、サービス満点だ。
本当に移転してきたくなるような町だ。子供のころから、川のそばの家に憧れていた。さっき私は嘘（うそ）をついた。タテカンのそばに三十分もいたわけではない。うち二十五分ほどのあいだは、橋の上から町並みを見おろし、うっとりとしていたのだった。

程よい勾配で、滑らかな半円を描く橋。
私は美しい女性の曲線を愛でるように、ゆっくりと橋の輪郭を目でたどった。
ペダルを思いっきり漕いで、自転車をすっ飛ばすにはうってつけの場所だ。
今から十九日前。子供たちだけではなく、大人たちにとっても夏休みの真っ最中の、八月十五日午後二時のことだ。誰かがこの橋をそうやって渡り、自転車のスピードを落とすことなく、私とタテカンの佇むこの場所までやって来た。
そして一人の男を撥ねた。男は激しく転倒し、歩道で頭を打って、救急病院に運ばれる途中で死亡した。死因は脳挫傷だった。
彼は六十五歳で、検死解剖の結果、死因だけでなく、胃の幽門部に早期癌があったことも判明した。しかしその癌が彼を殺すまでには、まだかなりの年月があったはずだ。彼の命を絶ったのが、一台の暴走する自転車だったという事実は揺るがない。
橋を渡り、風に乗って、走れ、走れ、ペダルを漕いで走れ。
犯人はまだ捕まっていない。だから所轄の城東警察署は、事故現場にこのタテカンを立てた。
「八月十五日午後二時ごろ、この場所で自転車による死亡事故が発生しました。この事故について何か目撃した方は、情報をお寄せください」
「死亡事故」。「目撃」と「情報」。さらには城東警察署の電話番号が、赤い文字になっている。
そう、これは立派な轢き逃げ事件なのだった。だからこそ、私も今ここにいる。
犯人を捜そうとしているわけではない。私は警察官でも弁護士でも検事でもない。私立探偵でも、もちろんない。妻子持ちの三十五歳のサラリーマンで、運転免許は持っているが、危険物取り扱い資格があるわけではなく、拳銃も所持していない。私は、できる限り善良であろうとしているだけの、ごく平凡な一市民だ。
それでも、自転車で道を走っていて人を殺してしまうことが容易に起こり得る社会では、善良で平凡であり続けることも、実はたいへんな偉業であるのかもしれない。

一昨日の夜のことだ。夕食が済み、すでに桃子はベッドに入っていた。昼間たいそう活発に遊んだらしく、彼女は私が『小さなスプーンおばさん』の最初のエピソードを二ページと読んでやらないうちに、すやすやと眠ってしまった。正直言うと、私は少し残念だった。スプーンおばさんのお話をもっと読みたかったのだ。子供のころ大好きだった本なので、読み返すのを楽しみにしていた。
しかし桃子とは約束していた。どんな本でも、お父さんは自分だけ先に読んだりしない。
いつも桃子と一緒に読んで、一緒に楽しもうと。だから本を閉じて娘の部屋の小さな書棚に戻すと、妻のいるリビング・ルームへと引き返した。
私の妻はソファに腰かけていた。何もせず、ただぼんやりとテレビに目をやっていた。彼女には珍しいことだ。家にいてくつろいでいるとき、妻はたいてい本を読んでいる。さもなければ何かしら手を動かしている。水彩画を描いているときもあれば、千ピースのクロスワード・パズルに挑んでいることもある。込み入ったフランス刺繍をしていることもある。いっときは通信教育でパッチワークを習っていた。だが、これも彼女にしては珍しいことに、半年ばかりでやめてしまった。
「わたしには向いてないみたい。布と布を組み合わせて、面白い柄をつくることができないの」
それならやめればいいと、わたしは言った。組み合わせて楽しむものは、他にもいくらでも見

つかる。
最近は、和紙を使って紙人形を作ることに凝っている。このところ毎晩、夕食が済むと、いそいそと道具箱を広げていた。
今夜は何もしていない。片手にテレビのリモコンを持ち、気のなさそうな表情で、番組の切れ目のコマーシャルを眺めているだけだ。
私が声をかけようとしたとき、妻がこちらを見た。そしてリモコンでテレビを消した。
「すぐ寝ちゃったみたいね」
私が隣に座れるように、ちょっと寄ってくれた。そんなことをしなくても、ソファは充分に大きい。結婚前の私の年収を全部はたいても、消費税分が足りなくなるくらいの高価な輸入家具だ。妻が席を動いたのは、隣に座ってほしいという意味なのだ。
だから私はそうした。妻はにっこりして、リモコンをフロアテーブルの上に置いた。
「実はね、あなたにちょっと相談したいことがあるの」
私はとっさに、離婚を切り出されるのだと思った。
信じられないような幸運のなかにあって、それがいつ自分から取り上げられてしまうかとビクビクせずにいるには、どのくらいの度量が必要なのだろう。仮にそれがバケツ一杯分ほどの量だとしたら、私が持ち合わせているのはコップ一杯分ほどでしかない。このコップが、バケツに成長するという見込みもない。
結婚して七年。私は常に、自分のコップを大事に持ち運んできた。少ししかなくても、まったくないよりはましだ。しょっちゅうひっくり返って中身をこぼしてしまうコップでも、掌ですくうよりは役に立つ。

「今日ね、昼間父と食事をしたの」
私の心臓が不規則に跳ねた。お父上か。ますます離婚の匂いがする。私は緊張した。
「そこで出た話なんだけど……」
妻の口調はのんびりとしている。
「父が、あなたに頼んでみてくれないかというの。自分で話せばいいじゃないって言ったら、それだと会長命令になるから、あなたが断りにくくなるって。わたしから話してくれって譲らないのよ」
確かにそうである。我が舅殿は、私の奉職する今多コンツェルンの会長なのだから。
しかし、「頼む」というのならば離婚話ではなさそうだ。義父が私を彼の愛娘のそばから追いはらおうとするのなら、それこそ命令すれば済むことなのだから。私は自分の度量を溜め置いてくれているコップの取っ手をしっかりと握りなおした。
「あなた今でも、父のことになるとすぐ顔が強張るのね。あれでけっこう優しいところもある人なのよ。あなたのことだって、気に入ってるんだから」
妻はくすぐったそうに笑い、私もくすぐってやろうというように、指でわき腹をつっついた。
私の妻、杉村菜穂子は二十九歳だが、笑うと二十四歳に見える。おおかたの女性とは逆で、化粧をすると三十一歳に見えることがあり、素顔だと二十歳に見えることが多い。
どんな年齢に見えるときでも美人だ。
誰にも、「まあ、可愛らしい奥様ですね」と言われる。もしくは「素敵な奥様」だと。私が「家内です」と紹介した後には。紹介する前には、誰も私たちが夫婦だとは思わない。
よくあるパターンでは、私は妻の秘書だと思われる。運転手ということもある。兄妹に間違わ

れたことが一度だけあるが、妻はその後しばらく、「仲のいい夫婦は顔まで似てくるっていうものね」と喜んでいた。私も喜んだが、心のなかでは首を振っていた。我々に兄妹かと尋ねた人は（ブティックの店員だったが）、他のどんな間違え方よりも、それがもっとも穏当な間違え方だと判断しただけだろう。

すっぴんで、簡素な綿のハウスドレスを着て、やわらかな髪を束ねて片方の肩の上に載せている今、妻は十八歳の娘のようだった。すらりとして、ほんの少し痩せ気味で、頬は青白い。それでも潑剌として見えるのは、瞳が明るいからだろう。ついでに言うなら、彼女の視力は両目とも裸眼で一・五である。だからあんなにたくさんの本を読めるのだろう。大金持ちの娘が、デパートの外商よりも、書店の外商の方と先に馴染みになるなんて稀有なことだ――と、わかったように言うが、私は妻と交際するようになって初めて「外商」という存在に会ったのだった。私と私の育った環境では、店とは客が足を運んで行く「場所」であって、客の家を恭しく訪ねてくる「人」ではなかった。

「父の運転手だった梶田さんのことなんだけど……」

フルネームは梶田信夫という人だ。妻が「だった」という言葉を使ったのは、彼がすでに故人であるからだ。私は妻の顔を見ながら、彼女の言わんとするところ、つまりは義父の依頼の内容をあててみようと試みた。

「そろそろ納骨だったかな」

義父は私に、お気に入りの運転手だった梶田氏の納骨に、また自分の代理として出席してくれというのだろう。しかし妻は、軽くたしなめるように私の膝を叩いた。

「納骨にはまだ早過ぎるわ。今はやっと半月だもの」

「亡くなったのは、先月の十五日だったよね？」

私だって忘れたわけではないのだ。八月十五日というのは、人の命日としてなかなか印象に残る日付である。

梶田氏が死んだという報せを、私たちは軽井沢のリゾート・ホテルで受け取った。電話をかけてきたのは義父の第一秘書で、私が常々（心のなかだけで）畏敬の念を込め〝氷の女王〟と呼んでいる人物である。

〝氷の女王〟は、今多会長が私に、梶田氏の通夜と葬儀に列席することを望んでいると伝えた。私はすぐに了承し、手荷物をまとめ、自宅に戻ることにした。妻は、私が一人では喪服のしまってある場所さえわからないだろうと心配し、一緒に戻ると言ってくれたが、私はやわらかく説得して諦めさせた。それが会長命令だったからだ。

〝氷の女王〟の伝えるところに曰く、

「この一週間ばかり、東京は猛暑です。最高気温が三十六、七度になることも珍しくありません。会長は、少なくともこの熱波が去るまでは、お嬢さまと桃子さまが軽井沢に滞在しておられることを望んでおられます」

私はその指示に従ったのだ。というより、義父にそう言われなくても、私は一人で戻ったと思う。体温よりも高い気温が、菜穂子の身体に与える影響が案じられたからである。あなたの娘のことを心配しているのは、あなただけではないのですよ、お義父さん。

いずれにしろ、私としては、会社に与えられた夏休みを数日早く切り上げただけのことだった。妻と娘はそのまま軽井沢で過ごし、桃子の幼稚園が始まるのを待って帰京した。

「梶田さんのお葬式はどうだった？」

尋ねられて、私は答えた。「簡素だったけど、しみじみしていたよ」
列席者は思いのほか少なかった。盆休み中ということもあったろうが、梶田氏が、今多コンツェルンの役員たちや賓客を送迎する役目を担う「車両部」の正社員ではなく、あくまでも義父の個人的な運転手であったということも影響したのだろう。
その葬儀に、義父はまるで故人の友人であったかのように、親しげな、しかし名前の目立たない花を出していた。今多コンツェルンからは、車両部で梶田氏と面識があったらしい数人が来ていただけだった。義父も来なかった。つまり私は名代だったのだ。
そのことの意味を、私はしばらく考えたものだ。そして、梶田氏について私が覚えている事柄を、義父もまたよく覚えているのだろうと結論を出した。
義父と親しく秘密を分かち合ったような気分を、ほんの少しだけ味わった。
半月前の回想に浸っていた私を、妻の声が引き戻した。
「梶田さんが亡くなって、お父さまの生活にもちょっと変化が起こったでしょう。いつどこへ行くのでも、車両部の人たちと一緒で。何だかそれが窮屈のようだわ。もちろん淋しくもあるのでしょうし。やっぱりお歳なのかもしれないわね」
「そうは思わないけどね」
私は妻が自分の父親を「お父さま」と呼ぶのを聞くと、いつもちょっぴりたじろぐ。桃子が「おじいちゃま」と呼ぶときもそうだ。
どちらも、身内の呼称としては、私の語彙に登録されてからの年月が浅いものだから。
「いいえ、物事の変化になかなか馴染めないというのは、年齢のせいよ。自分でも認めていたし」
私の舅にして妻の父親であり、財界の要人の一人でもある今多嘉親は、今年七十九歳である。

妻は末娘で、歳の離れた兄が二人いる。二十歳年長の長兄は今多コンツェルン社長であり、十八歳上の次兄は専務取締役だ。二人の肩書きはそれだけでなく、兼務している傘下の企業の役職が、他にもたくさんあった。どうしても覚えきれない。今多コンツェルンの組織図は、いまだに、私の目には恐ろしく込み入った進化の系統図にしか見えないのだ。それも、どこか地球外の生態系の。
それを読み解こうと努力した時期も（ごく短い間だ）あったけれど、その努力は空しい結果に終わったし、それで私には何の不都合もないということだけは、今ではよくわかっている。とにかく彼らはトップにおり、彼らの頭の上には親父殿しか存在していないということさえ押さえておけばいい。
そして、自分はその末端にいるのだということも。
では菜穂子はどこにいるのか。図の外にいる。系統図の脇に添えられた、とても美しいカラーのイラストとでも言えばぴったりだろうか。
彼女の母親も、同じように図の外にいる。
父親が五十歳の時の子供だと言えば、誰でも察するかもしれないが、菜穂子の生みの母親は、義父の正妻ではない。だから二人の兄たちも腹違いだ。
そのことで、格別辛い目にあったわけではないと、菜穂子は言う。お父さまもお兄さまたちも、わたしにはずっとよくしてきてくださったもの。今もそうよ、と。
菜穂子の母親は、銀座の町の端の方に、親から受け継いだ小さなギャラリーを持っていた。彼女自身も絵描きだったが、美術界に名前が残るような作品をものしたわけではない。ギャラリーのあがりで、質素にしていれば生活に困ることはないので、好きな絵を描いて暮らしていくこと

のできた幸せな女性だったのだろう。
彼女がどういう縁で今多嘉親と知り合ったのか、詳しいことを私は知らない。娘の菜穂子が知らないから、私にも教えようがないのである。義父も話してくれないそうだ。
ともあれ、今多嘉親と婚姻外の関係を結び、菜穂子が生まれたとき、彼女の母親は三十五歳だった。今多嘉親は菜穂子を認知したが、むろんのこと生活は別々だった。それでも、菜穂子が言うには、母子二人の暮らしは楽しかったそうだ。父親にも、けっこう頻繁に会っていたそうである。
菜穂子の母親は、菜穂子が十五歳のときに亡くなった。急性心不全だった。
未成年の菜穂子は、父親の元に引き取られることになった。姓も父の姓にかわった。そこで初めて兄たちとも顔を合わせた。
菜穂子にとって幸い（といっては失礼かもしれないが）なことに、今多嘉親の正妻も、当時すでに亡くなっていた。彼女は姉さん女房で、義父よりも五つ年長だったと聞いている。その死は、菜穂子の母の死よりも二年早かった。
二人の兄たちも、思いがけず身近で暮らすことになった美しい妹に、苛烈な感情を抱くような感じやすい年頃ではなくなっていた。長兄は結婚して子供もあり、次兄は新婚ほやほやだったそうだ。
今多コンツェルンの後継者であり、若き財界人として多忙な彼らは、菜穂子に適度な無関心と、それを冷たいと感じさせない程度の親切とを与えた。もちろん彼らがそのように快適な距離を保てたのは、菜穂子が、彼らと争って今多コンツェルンという巨大な「資産」を分け合うような存在ではないことを、最初からよく言い聞かされていたからではあろうけれど。

菜穂子は生まれつき身体が弱いのだ。肥大症と言い切るまでのことはないが、心臓が普通の人よりもやや大きい。人間の命を司るこの臓器は、サイズが大きいとそれを動かすための負担が増し、かえって弱くなってしまうのだそうだ。母親もそうだったというから、体質なのだろう。
幼いころ、菜穂子は何度も死にかけた。普通の風邪でも、高熱が出れば彼女の虚弱な心臓には文字通りの命取りになる。
友達と外で遊びまわることもできず、体育の授業は見学ばかり。遠足にも移動教室にも運動会にも参加できない。それどころか、何ヵ月も休学しなくてはならないこともあり、結果として彼女は小学校に七年通った。中学と高校はそれぞれ三年で無事卒業、大学にも合格したが、通いきることができずに結局二年でやめている。
学校では、いつも一人ぼっちで淋しかったと菜穂子は言う。ただ、母親から絵を描くことを習い、本に親しんだ彼女は、退屈をもてあますことはなかった。友達は空想の世界でたくさんつくった。
今多嘉親は、そういう愛娘のことをよく知っていた。なにしろ、彼の伝手を使って、小児科で有名な病院には、片っ端から菜穂子を連れてゆき、診てもらったというのだから。
だから菜穂子が母を失い、寄る辺ない身の上になったとき、この父親の考えたことはただひとつだけだった。この娘が一生、世間の煩わしい事柄から解放され、安楽に、心安らかに暮らせるようにはからってやろう。今多コンツェルンの財力があれば、そんなことぐらい造作もない。
こうして、現在の菜穂子の暮らしがある。
今も変わらずおっとりとして菜穂子と距離を置き、ときおり優しく挨拶をおくってくれる義兄たちは、二人とも私より年長だ。頭も私よりはるかに切れる。世慣れているなどという言葉を

使っては失礼にあたるだろう。彼らは、その気になりさえすれば、世の中の方を自分の都合に合わせることができる立場にあり、その能力もある人物だ。もちろん、義父も同様である。

私にとってばかりではなく、世の中のかなりの部分にとって幸いなことに、今多家の三人の男たちは、自分たちの擁しているそういう力を、みだりに使おうとはしない。私がそうであるように、彼らも一人の人間としてさまざまな長所と短所を合わせもっている（そのはずだ！）が、短所のなかに、「意地悪」という項目はない。「暴君」という要素もない。少なくとも身内に対しては。そのことに、私は敬意を抱いている。

「梶田さんの車には、僕も四、五回は乗せてもらった」と、私は言った。

「お父さまと一緒に？」

「うん。グループ広報室に入ってから、何度かお供する機会があったからね」

但しそのうちの一度だけは、七年半前のことで、私はまだ今多コンツェルン会長室直属の今多グループ広報室には入っていなかった。生涯忘れることのできない経験だったが、妻はそのことを知らない。

その時の車中会談で、私は菜穂子との結婚を許してもらったのだった。義父は現在同様、当時も超のつく多忙の身だったから（財界人で多忙でない人間などどこにいる？）、会談は長いものではなかった。せいぜい一時間ほどだったろう。小雨の降りしきる都心を、私の未来の舅と私を乗せた銀色のメルセデス・ベンツは、ぐるぐると走り回った。運転席の梶田氏は、まるで彼自身が車の一部であるかのように、滑らかにメルセデスを操っていた。未来の舅との話し合いで息が詰まるほど緊張していた私は、そんな自分を励ますために、あるいは今多嘉親の前だからといって臆してはいないことを見せつけようとして、対等の男同士であることを誇示しようとして、梶

田氏に向かって冗談を飛ばそうとした。ところであなたは、工場出荷時からこの車についていたのですか？　それともディーラーがあなたをオプションでつけたのですか？

つまらない冗談だ。結局、口にすることはできなかった。私は今多嘉親の前で臆していたし、対等の男同士でもなかったのだから。

私の記憶に残っているのは、運転席の梶田氏が終始無言で、ごくかすかに、品のいいアフターシェイブローションの匂いを漂わせていたことだけである。

私が降りる時、彼も運転席から降りてきて、後部座席のドアを開けてくれた。私が不器用に傘を広げているあいだ、小雨に濡れながらも姿勢を正してそばに立っていた。

そして、私にだけ聞こえるくらいの小さな声で、私にだけ見えるぐらいの小さな笑顔と共に、こう言った。

「おめでとうございます」

私が受けた、最初の祝福の言葉だった。その後ろに、「でもねぇ」とか「これから大変だ」とか、「うまくやったじゃないか」とか、猜疑、冷笑、疑念、軽蔑などなど、さまざまな表情や仕草のくっついていない、純粋な「おめでとう」だった。私の目には、彼が喜んでくれているのが見えた。気持ちが伝わってきた。それは、私の実の親たちがとうとう発することのできなかった祝福の言葉だった。だからよく覚えている。

義父も覚えていたらしい。聞こえていたのだ。だからこそ、大勢いる秘書や補佐役の誰かを遣ればと済むところに、わざわざ私を名代に立てて、梶田氏の死出の旅の見送りに行かせたのだろう。

そして今度は、その梶田氏にかかわる何事かで、義父が私に頼みがあるという——

梶田氏は事故で亡くなった。真夏の陽盛りの歩道で、自転車に撥ねられたのだ。撥ねた人物は

逃げてしまった。梶田氏を見つけて一一九番通報してくれたのは、通りがかりの主婦である。
犯人が捕まったという報せは、まだない。自転車による歩行者の死傷事故というのは、昨今じわじわと増加しているという。自転車が歩行者と一緒に歩道を走れるように交通規則が変えられたのは、昨日今日のことではない。ただ、ちょっとした衝突ではなく、救急車が来るような死傷事故が目立つようになったのは、ここ数年のことらしい。その原因としては、自転車の性能がアップして、誰でも容易にハイスピードが出せるようになったことと、携帯電話の普及が関係しているのではないかと推測されているという。街中を歩いていて、背後から曲芸のようなハンドルさばきで自転車に追い越されたことや、自転車に乗りながら携帯電話をかけている人とぶつかりかけた経験なら、私にもある。
義父の意見は違うようだった。梶田氏の通夜と葬儀の後、会長室へ報告に行ったとき、吐き捨てるようにこう言っていた。
「民度が下がっておるのだ」
常識のない人間が増えている――と言い換えれば判りやすい。街中でこんなことやあんなことをすれば、こんなことやあんなことが起こるかもしれないからやってはいけないというブレーキが欠けている。義父の意見に私も賛成だったし、その怒りも理解できたから、今にも彼が口を開いて、どんどん自堕落に自己中心的になっていくばかりの日本人と、不可解な現行の交通規則に関する非難と抗議の叫びを発してくれるのではないか――と、ちらりと夢想して楽しんだ。義父の怒り方には、見る者を爽快な気分にさせてくれるところがあるのだ。怒られている当事者でない限り。
若いころ、義父は「猛禽」とあだ名されていたそうである。八十歳を間近にした今でも、その

面影は色濃く残っている。日本人にしては珍しい見事な鉤鼻に、切れ上がった目尻と険しい目つき。体格は小柄で華奢だが、それがかえって義父の容貌に凄みを与えていた。世間ではよく、小柄な男は気が強いという。戦闘機だって、たいていの輸送機や旅客機より、ずっとサイズが小さいではないか。
機動力を活かして大空を自在に飛び回り、もっと身体の大きい鳥たちが入り込むことのできない森のなかにまで舞い降りて、獲物を狩る。義父のあだ名には、そういう意味がこめられていたのだろう。
今多コンツェルンの前身は、義父がその父親から受け継いだ都内の運送会社で、営業範囲は関東一円に限られていた。工業資材や小さな部品をパレットに載せて運ぶことを生業としていた。
義父はそれを一代でここまで大きくしたのである。現在でも、物流業は今多コンツェルンの大きな核ではあるが、依然として運ぶのは工業部品や資材が主なので、義父が独自に開拓した外食産業のチェーン店や、吸収したり傘下におさめたりしてきた他の会社の名前の方が、一般にはよく知られているだろう。
もちろん規模の大小はある。もっとも小さいものは、東京と博多に一店舗ずつしかない高級エステティック・サロンだ。私は足を踏み入れたことさえないが、菜穂子は数回利用して、地味な店だと驚いていた。高名な舞台女優御用達の店なのに、である。いや、だからこそなのかもしれない。女性誌などには絶対に知られず、取材も受けず広告も打たない。そして法外な値段をとるが、確かに効果はあるそうである。
義父はエステになど行ったことはないが、そのなめし革のような色の顔はいつも艶やかで、疲労の色が浮かんでいたこともない。梶田氏の横死を怒っているそのときは、興奮のせいでなおさ

ら血色がよく見えた。
「梶田には娘が二人いてな。上の娘がもうすぐ結婚するところだった。他人の迷惑も考えずに自転車で暴走する輩のせいで、真面目に働いていた男が娘の花嫁姿を見ることができなくなってしまったのだ」
通夜と葬儀で、私も梶田氏の二人の娘には会っていた。梶田氏は二年前に妻に先立たれていたので、喪主を務めたのは長女だ。花嫁衣装よりも先に、母を、次には父を送るための喪服を身につけることになってしまった姉妹は、かすみ網で捕えられて籠に押し込められたばかりの小鳥のように、肩を寄せあって怯えているように見えた。
私がそのときのことを話すと、妻は大きくうなずき、身をよじって私の方を向いた。片手がまた私の膝の上に乗せられる。
「そのお嬢さんたちのことなのよ」
梶田氏の娘たちは、葬儀が終わって一週間ほどすると、わざわざ義父のところに挨拶に来たという。その折に義父は彼女たちに、警察の捜査に進展があったら教えてほしい、また、何か困ったことがあったらすぐ相談に来るように――と言ったそうである。
その数日後、梶田姉妹から義父に連絡があった。相談事ができたというのだ。義父は喜んで、休日に自宅に来るようにと招いた。そして彼女たちの話を聞くと、これは自分よりも、娘婿に向いている案件だと判断したのだそうだ。
妻は、少しばかり私を驚かそうとしたのか、思わせぶりにちょっと間を置いてから言った。
「梶田さんのお嬢さんたちは、本を書きたいのですって」
「本？」私は眉を持ち上げてみせた。私の眉は端が下がっているので、これはなかなか難しい作

業だ。
「お父さんの伝記というか」妻は言って、自分で自分の表現に小首をかしげた。「それだと大げさになるわね。要するに、お父さんがどんな人生をおくり、どんな人だったかということを文章で書いて、本にして出版したいということじゃないかしら」
私にも、ようやく義父の考えがわかった。私は編集者だ。本を作るとなれば、編集者の出番だ。
「それじゃ僕に、その原稿を見てくれということなのかな？」
「たぶんね。具体的な内容は、お嬢さんたちに会って聞いてみた方が話が早いと思うけれど、でもあなた、どう？　引き受けるにしろ断るにしろ、一度は会ってやってほしいと父は言っていたけど、あなたが気が進まないなら、わたしが代わりに会ってもいいのよ」
気持ちは嬉しいが、義父は私が断るなど、まして、その手間を惜しんで菜穂子に代わってもらうことなど、想像もしていないだろう。
「いや、大丈夫だよ。会ってみる。先方が落ち着いたところで、もう一度お悔やみも言いたいしね」
「時間はとれる？」
「もちろん」
「そう」妻はまたにっこりと笑った。「ありがとう。父のわがままにつきあってくれて」
さほどわがままな依頼だとは思わない。七年と半年前、私は海に飛び込む決心を固めた。今になってその海に、コップ一杯や二杯の水が足されようと、全体の嵩に変わりはない。
「さっそく連絡をとってみるよ」

そう約束し、話に区切りをつけてしまうと、その後は、私たちは、子どもが早寝した後の若い両親にふさわしい時間の使い方をすることにした。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。